

君を守る歌が歌いたい。

作、岩井利和

柚木凜久（ユノ） 去年までバンドを組んで歌っていたがバンド解散している。音楽やめられない現二年生。

九重裕（ココ）歌は人を幸せにできると信じている。今年からギターを始めた一年生。

0,此処にある 彼の歌。

舞台が開く。男の子が一人たっている。  
男の子、星をみている。

柚木 星は見ている。遠くからずっと。でも、俺の距離からは遠すぎて、君のもとに会いに行くことができないみたいだ。遠くの星の誰かさんへ、俺の声が届いてますか。きっとあなたを見つけてくれる人がいますよ、きっと、きつとに思いを託して、いつかを待ち続けてください。きつときます、きつと、すべてが報われる朝が。

物音、大きい。

柚木 俺の歌が届くかはわからないけど、きつとあなたたちに届いてほしい、あなたたちが救われてほしい。これが…これが最後だから。

柚木、思い切り息きを吸い込み、歌おうとする。  
一瞬の静寂。タイトル、浮かび上がる。

映像 「君を守る歌が歌いたい」

オープニング映像。Flumpool  
「星に願いを」を使いながら。  
アニメのオープニングみたいになってる。

九重 歌、歌は魔法だ。心が荒んだ時は薬になり、悲しい時には寄り添う力になり、道がわからなくなった時は道標になる。歌は人を救う力がある、だから俺は歌を歌いたい。

俺の歌で誰かが救えるなら、俺の歌はきっとその人のための歌だから。

柚木 歌、

九重 歌。

柚木 歌うのか、

九重 歌わないと。

声 歌って、

声 歌って

声 歌って

柚木 歌いながら思い出すのは、ほんの数週間の愛しい思い出だけ。

九重、柚木と叫ぶ。

柚木 一瞬で蘇る思い出の群れ、ある日の教室での話。思えばあの日も雲ひとつない空だった。七月の空がまぶしいあの頃の話。

九重 一瞬で蘇る思い出の群れ、ある日の教室での話。思えばあの日も雲ひとつない空だった。七月の空がまぶしいあの頃の話。

オープニング映像、フィルムが回される。

映像 「第1話 澄んだ空」

ある日の放課後。休み時間。

ギター、ヘッドホン。典型的な軽音始めてちょっと立つ系男子。

九重 学校はなんだか不思議な空間だ。普段だったらかかわりもしない人同士が隣の席に座って授業を受けている。この一期一会間もいつかは気にならなくなっていくんだろうけど、今は大切にしたいと思う。一期一会というのを教えてくれたのは国語先生、先生は人とのつながりを大切にする人でした。いつも口癖みたいに

九重、「」内先生のものまね。

九重 「古今和歌集、詩集、百人一首に万葉集。こんな風に、人は昔、歌を作って、誰かに届けていました。そこまでして伝えたい相手がいるなんてとても素晴らしいことのように思います。今はピンと来ていないあなた達にもいつか届けたい人ができるから。人を大切に思ってあげてくださいね。」って。誰かに届ける歌、なんとなく胸に残る言葉だった。

授業が終わる。九重、ギター、カバンを抱えて移動。

九重 授業が終わるとみんなが動き出して、教室や学校の周りに飾り物が増えていく。カラフルな色のクラスシャツ、団結とか、協力とか、命を燃やす瞬間みたいなもの、飛び散ったペンキや買い込んだアイスの色。笑い声や叫び声が生きてるって証明みたいに力強い歌声を奏でていた。一瞬の瞬きというか、今だけのこの空間が歌みたいになる、この感じがなんともいえず好きだった。

九重、部室に行く。窓の外を見ている柚木がいる。  
柚木、ぼーっと窓枠に寄り掛かりながら外を見ている。

映像 ほんの一瞬の静寂、その人の回りには音がなかった。  
九重 あ、あの、  
映像 不思議な空気、思えばこの時、すでに暑さにやられていたのかもしれない。  
柚木 ?はい。  
九重 ここ、部室、なんですけど。  
柚木 えっ、、あ、ごめんね。

柚木、荷物をまとめる。ふらふら。

九重 えっ！大丈夫ですか？  
柚木 、、(足元不安定)  
九重 だ、誰か呼びましょうか？  
柚木 ああ、うん。大丈夫。

柚木、ふらふらと去っていく。

九重 大丈夫かなあ、、。

九重、ギターを弾く。声出しも少々。  
あまりうまくない。

九重 ……。

九重、だんだんさっきの一件が心配になってくる。

九重 ……いや帰れないだろ。

九重、ちらっと扉の外を見る。  
案の定、柚木はうずくまっている。

九重 ……あ！いる！

九重、柚木に声をかける。

九重 あのー！あれならだれか呼んできませんか？

柚木 ……。平気。

九重 ……そう、ですか。

沈黙。

九重 あ！なんか、います？

柚木 ……いい、(体は大丈夫ちゃう)

九重 熱中症とか多いみたいだからなんか飲んだ方がいいと思うし、行ってくるんで！死んじゃダメですよ！

柚木 ……どうも。

九重、カバンをもって買い物に。

柚木、ゆっくり部屋を見渡す。

柚木、ギターを見つける。

柚木 ……なんで、

柚木、ギターに触れる。

柚木、少し鳴らしてしまう。

また沈黙が戻る。

柚木 ……。

九重、戻ってくる。

柚木 あ……。

九重　好きなんですか！？ギター！

柚木　・・・えっと、

九重　あ、これ。

九重、先ほど買ってきたソーダー水(※要ペットボトル)を差し出す。

柚木　・・・ありがとう。

九重　でもなんでこんなところに？

柚木　・・・。

九重　ほら、ここ三階の端だからわざわざ来ようと思わないと来れないし、正直授業で使ってるのも見たことないし。

柚木　・・・そうだね。

九重　なんか深い理由とか？

柚木　特にはないかな。

九重　まあ・・・ですよ。

柚木、ギターに目をやる。

柚木　..これ、君のギターなの？

九重　まあ、はい(照)バイトしてやっと買えたんです！中古ですけど・・・。

柚木　そうなんだ。

九重　でもまだ全然わかんなくて、

九重、ギターを鳴らす。めっちゃカジュアルな音。

九重　これしかできない、んです。

柚木、不覚にも笑ってしまう。

九重　あ、笑った。

九重、少し安心する。

九重　いやー、本とか読んでやってみただけどやっぱりむずいですよ。こういうの。全然わかんないもん。

九重、マニュアルを見ながら弾こうという。

柚木 音楽・・・好きなの？  
九重 うーん、たぶんここから(さっきの音を鳴らして)好きになる気がします。  
柚木 ・・・・そっか。(優しい顔をしてペットボトルのソーダー水を飲む)

九重、0.001mm心動いている。

九重 引きながら歌うとか、いつかできるものですかね？  
柚木 うーん・・・どうだろう、  
九重 なんか、二つ同時にやるの難しい。  
柚木 慣れじゃないかな、そういうの。  
九重 本読みながらご飯食べるみたいな。  
柚木 それとこれとは違うって。  
九重 どう違うんですか。  
柚木 うーん・・・なんとなく？  
九重 答えになってない。  
柚木 まあ、やれば上手くなると思うよ？  
九重 だといいけど。  
柚木 好きならきつとうまくなるよ。  
九重 かなあ・・・。

九重、ギターに苦戦。

柚木 弾きたい曲とかはあるの？  
九重 えーっとー・・・へへっ。  
柚木 ・・・・ないの？  
九重 マニュアルとギター買ったらお金なくなっちゃって・・・。  
柚木 ・・・・そうなんだ。

柚木、一生懸命な彼に少し心が動く。

柚木 ちよっと待ってて。

柚木、棚を探す。楽譜のファイルが出てくる。

柚木           これとかいいんじゃないかな。  
九重           ・・・これ、楽譜？  
柚木           うん。  
九重           おおっ！楽譜・・・！

九重、すごくうれしそう。でもすぐ冷静に考えて。

九重           あっ・・・でも、勝手に持ってっちゃうのはどうなんでしょうか？  
柚木           ・・・いいんじゃないかな？  
九重           でも・・・。  
柚木           むかしココを使ってたバンドのものだろうし・・・彼ら卒業してもういないし。  
九重           ・・・はあ。  
柚木           楽譜だって弾かれるために生まれたんだからここで埃被ってるよりはずっと  
                  うれしいと思うよ？  
九重           ・・・うーん。  
柚木           まあ、よかったらだから。  
九重           いや！俺は借ります！  
柚木           ・・・借りる？  
九重           だって、これを買ったのはそのバンドの人ですよ？もしまた弾きたくなっ  
                  た時に楽譜がなかったらすごく困るだろうし。  
柚木           ・・・そんな日来ないと思うけど。  
九重           でも・・・こう、大事にされてたんだってわかりますもん。  
柚木           ・・・まあ、君がいいならいいんじゃないかな？

柚木、外を見る。うっすらと夕方。

柚木           今日はありがとう・・・じゃあね。  
九重           あっ！待ってください！  
柚木           ・・・なに？  
九重           ・・・俺楽譜読めないです。  
柚木           ・・・・・・・・・・・・・・・・そっか。  
九重           どうしよう・・・。  
柚木           マニュアルに載ってないの？  
九重           やっすいやつだからそこは別売りなんです。  
柚木           なんでそんなの買っちゃったの。  
九重           買えるのこれだけでした。

柚木     ・ ・ そっか。  
九重     せっかくの楽譜なのに ・ ・ 。

柚木、可笑しくなってきた笑いながら。

柚木     ・ ・ 耳はいい方？  
九重     うーん、わかんない。  
柚木     一回聞いてみた方がわかりやすいよ。  
九重     うーーーーーん…。  
柚木     ちょっと借りるね。

柚木、ギターを借りて  
柚木、一瞬空気が変わる。  
柚木、ギターを弾く。がんばって。

九重     ・ ・ ・ ・ ・ ・ え？

柚木、さすがにやり過ぎたと気付く。

九重     す、すげええええええ！え、ほんとに、すげええ！

柚木、荷物をまとめ足早に去ろうとする。

柚木     ・ ・ ・ 。ありがとう。練習すればできるから頑張ってね。じゃあね。

九重、道をふさぐ。

九重     話があります！  
柚木     ・ ・ ・ なに？  
九重     話というよりお願いなんですけど。  
柚木     大丈夫、君なら一人でもできるよ。  
九重     俺にギターを教えてください！  
柚木     話聞かないね君。  
九重     でもやっぱりすごいですもん！お願いしますよ！

柚木、困った顔。

九重 えっと・・・あ！そうです！バイト代だしますから！  
柚木 教本を買うお金もないのに？  
九重 えっと・・・その・・・あ！これ！

九重、先ほど買ってきたソーダ水をもって。

九重 これ俺のおごりだったんですけどバイト代の前借ということで。  
柚木 強引だよ君。  
九重 あーあ、大事なソーダだったのに・・・。  
柚木 いいよ返すよ。  
九重 いいです返品不可なので。  
柚木 横暴すぎない？  
九重 文化祭まで！それまでには何とか弾けるようになるので！  
柚木 ・・・・本気、なの？  
九重 俺、自分で弾いて歌いたいんです！どうしても！  
柚木 ・・・・。

柚木、深いため息。

柚木 ・・・・わかった。  
九重 よっしゃ！  
柚木 君が弾いて歌えるようになればいいんだよね。  
九重 はい！  
柚木 ・・・・いいよ。ジュースのお礼でね。

九重、すごくうれしさが出ている。

柚木 じゃあまず明日までにコードを全部さらってきてね。  
九重 え？急じゃないです？  
柚木 できないと教えるのは難しいかなあ。  
九重 ええ・・・。(意を決して)わかりました。完璧なものを見せてやりますよ。

九重、荷物をまとめて。

九重 それじゃああの、えっと・・・これからお願いします。九重裕です。

柚木 ああ、俺は…柚木でいいよ。  
九重 (うれしそう)はい！じゃあ柚木さん！また明日！

九重、嬉しそうに去っていく。

柚木 ……また明日、か。

柚木、残っていたソーダ水を飲む。

映像 「すっかりぬるくなったソーダ水は甘味の方が強かった。」  
映像 「外はすっかり日が暮れて、すでに一番星を映していた」  
映像 「ひとつだけさみしく光っていた星の横に小さな星を見つけた」  
映像 「でも星と星には距離がある」  
映像 「何万光年という距離は何かを届けるにはもう遠すぎた」  
映像 「今更届けたいものを見つけたって意味がないんだ」  
映像 「こんなに遠くなったら、もうぼくの歌なんて届かない」

柚木、苦笑い。

柚木 なにやってんだ…俺。

柚木、窓から空を見ている。

九重、家でギターを練習している。

九重 なんだか不思議な人に出会った。どこか吹いたら消えてしまいそうな人で、  
だけど歌っているときはキラキラした人で、音楽を楽しむってきつとこういうことなんだろうな  
って思った。へたくそ上等、俺は下手でも横好きなんだ、横好きパワーで何とかしてやる。  
くっそーーーー！

九重、最初のシュールな音。

柚木、星を見ている。

柚木 ……だっさ。

柚木、小さなため息。

Music by [キヅグチ] センチミリメンタル



九重           できたっ！  
柚木           (びっくりして嬉しそう)やるじゃん。  
九重           へへーん。(どや)

(0 : 38-0 : 48)

さらに別の日。

九重           (窓の外を見て)文化祭って早いっすね。  
柚木           そうだね。  
九重           なんか、バーツで準備してガーっていなくなる感じ。  
柚木           花火みたいだね。  
九重           花火ってよりは一番星って感じ。  
柚木           どいうこと？  
九重           なんかかっこいい感じ。  
柚木           (笑っちゃう)そうだね。

(0 : 49-1 : 00)

日々は巡る。時間はあっという間に過ぎていく。

九重           よっしゃ！一番できた！  
柚木           もうそろそろ歌えるんじゃないかな？  
九重           二つ同時にやるとか難しいです。  
柚木           まだ言ってる(笑う)  
九重           まだできないです、  
柚木           自信持ちなって、  
九重           あ、そうだ！  
柚木           なに？  
九重           お手本みたいです！  
柚木           ああ・・・。  
九重           お願いします！

すごくキラキラしたまなざしの九重。  
柚木、悩んだ末仕方なく息を吸う。歌う。  
(1 : 00-1 : 10)

九重　　歌、柚木さんの歌はなんだか儂くて、必死で、きっと今だけしか聞けないんだろうなって感覚になる、そんな歌だった。今だけのこの歌を、この瞬間を柚木さんは俺にくれている、そんな思いがありなんだか気恥ずかしくなった。・・・見合う人間になりたい、そんな気持ちが強くなっていったのは思えばこのころからだった気がした。歌う、

柚木　　歌う、歌うと頭が真っ白になる、体に渦巻く感情がすべてメロディーラインに乗って吐き出されていく、すごくすがすがしい気持ちと半面に大事な感情や後悔も流れてしまいう気がする、空っぽに満たされる、そんな表現がぴったりだった。忘れてはいけなはずなのに、溢れる

九重　　歌、

柚木　　歌があふれる

九重　　歌いたい、

柚木　　歌っていいのか。

声　　歌って、

声　　歌って

声　　歌って

九重　　歌いたい、きっと俺は柚木さんと歌いたって思うようになったんだ。たしか文化祭の三週間前、入道雲が高くなり始めたころ、帰り道が涼しくなり始めたころの話。

映像　　「第3話 夕暮れの雨」

柚木　　あ・・・。

窓の外を見る。通り雨が降り文化祭の用意が片付けられる。

柚木　　ふってきたね。

九重　　うわあ・・・そうですね。

柚木　　なにか困るの？

九重　　傘ないんですよ。

柚木　　まあ・・・通り雨だからすぐ止むんじゃないかな。

九重　　だどいいんですけどね。

柚木　　ちょっと休も。

九重　　あ、はい。

九重、少し休憩。

柚木、窓にもたれる。

九重 雨の日ってなんか静かですよ。  
柚木 そう？  
九重 世界がシーンってする感じしません？  
柚木 少しわかるかも。

柚木、九重、静かに雨の降る外を見ている。  
静かな心地よい空間が流れる。

柚木 そいえば・・・なんで始めたの？  
九重 言いませんでしたっけ？  
柚木 そうだっけ？  
九重 柚木さん意外と適当ですね。  
柚木 ごめんごめん(笑う)。  
九重 ずっとあこがれてたんです。  
柚木 ふうん。

九重、回想。

九重 友達にライブ連れてかれて、正直あんま興味ないとか思ってたんです・・・。人多いとかタオル買えとかめっちゃ並ぶとか熱いとか、ガチ勢の声とかライブの受付の人の甲高い声とか。  
柚木 (笑いをこらえている)そっか。  
九重 たぶんもう来ることないかなとか思ってたんです。だってここまで良い思い何もしてないし、誰って聞いたら友達めっちゃ語ってくるし CD 貸すとか言ってくるし。正直終始帰りたいて思っていました。  
柚木 好きになる要素ないじゃん。  
九重 でも、なんかライブ始まったら、みんなシーンって静かになって。音が会場を飲み込んだんです！さっきまでのもやもやとかイライラとかが嘘みたいに全部吹き飛んで、ああ、このためにきてるんだってなったんです。  
柚木 そっか。  
九重 笑ってます？  
柚木 いやあ、好きなんだなっておもって。で、そっからバイト尽くし？  
九重 まあ、はい。  
柚木 でも一人でバンドって矛盾してない？  
九重 …ですね。

柚木 バンドできないじゃん。  
九重 おいおい考えてるんですよ。

柚木、笑って窓の下を見てる。

九重 そいえばなんで始めたんですか？  
柚木 うーん・・・人に勧められて。  
九重 へえ！すごいですね！どこの人ですか？  
柚木 ああ・・・もういないよ。  
九重 えっ・・・。  
柚木 ああ、大丈夫。死んだとかじゃないから。普通に卒業したんじゃないかな。  
九重 そうですか・・・。  
柚木 うん。  
九重 会ったりとかもうしてないんですか？  
柚木 うん。

柚木、外を見ている。少し寂しそう。

九重 ・・あの、  
柚木 なに？  
九重 ・・・なんか、あったんですか？  
柚木 ん？別に。  
九重 ・・そうですか。でも、また集まるといいですね。  
柚木 ・・・。

雨は静かに降っている。

柚木 音楽楽しい？  
九重 はい。  
柚木 そっか。よかった。

雨は静かに降っている。

九重 この時、なんだか泣きそうな顔にも、怒ってる顔にも、何とも言えない顔にも見えた。なんとなくだけど、柚木さんは音楽を楽しみづらいたらうなっていうのもなんとなく感じていて、だから、なんか、こう、俺がその悩みを取っ払えたらなって思った。から、少

し思い切って、新しいことをしてみようと思った。

九重、席を立つ。

柚木    ?どっか行くの?  
九重    飲み物でも買ってこようかなって。  
柚木    俺の分は大丈夫だよ。  
九重    もうあんなことしませんよ。  
柚木    はいはい。

九重、財布をもって去っていく。

柚木、なにか釈然としていない。

柚木    ・・・(息を吸う)。

柚木、歌おうとするがやめる。

柚木、改めていまの自分を考える。

柚木    ・・・(ため息)。

九重、サイダーを買って戻ってくる。

文化祭のチラシをもって。

九重    柚木さん。

柚木    ん?

九重    あの、これ。

九重、文化祭のチラシを見せる。

九重    俺、これに申し込みたいです。

柚木    ・・・文化祭?

九重    ・・・はい。

柚木    ・・・。。そう。

九重    どうしても、歌いたい歌ができて、で、届けたい人がいるんです。

柚木    ・・・ふうん。

九重    ・・・助けたいんです。その人を。

柚木 助ける・・・。

柚木、かつての自分を思い出す。

柚木 ……うん。

九重 あ、それで。

柚木 いいんじゃないかな？出てみても。

九重 本当ですか？

柚木 うん・・・。

九重 ……一緒に出てほしいです。

柚木 ……。

九重 あ、ほら。一人だとバンドじゃないですし。

柚木 ……ごめん。

九重 えっ・・・？

柚木 きっと君一人でやった方がいいよ。あ、他にバンドやってる奴とかもいるだろうしそこか行ってみたら？

九重 ……なんか、変なこと言ってすいません。

柚木 ……ごめん、今日は終わりでいいかな？じゃあね。

九重 あ、はい。

柚木、帰っていく。

九重 また明日。

九重 ……明日とிட்டのに、柚木さんは部室に来なかった。なんか怒らせたかなって思った、謝りたいけど、なんかまた怒らせてしまうかもと思うと、どうしてもいけなかった。…一人でこの部室にいると静かさがつらくなる。そんな自分を情けなく思ってひたすら歌を練習した。何でか分かんないけど、うまくなったらもしかして戻ってきてくれるんじゃないかなって思って、ひたすら歌い続けた。でも、どんなに叫ぶように歌っても柚木さんに届かないこともわかってた。なんだか急にテンションが下がって、こんな時にぴったりの音楽はないかなと気になり、柚木さんが使っていた楽譜の棚を探すことにした。

九重、ギターを置いて楽譜の棚を見る。

映像 「第4話 twinkle star」

九重、楽譜の棚を落としてしまう。

九重 あああすいませんすいませんすいません。

九重、楽譜の名前に目が止まる。

バンド名「**Twinkle star**」と表記されている

九重 トゥインクルスター..あ、ここのバンドか。

九重、手を合わせる。

九重 お借りしてます。ん？

九重、各々の名前が書き込まれた写真を見つける。  
ユノとかかかっている部分の人が柚木さんそっくり。

九重 ユノ?? 柚木さんだよな、

九重、楽譜を一通り調べる。  
彼がメインボーカルであったことを知る。

九重 ここのバンドだったんだ。

九重、奥の方の楽譜を見つける。  
Dear yuno と書かれている。  
誰かが柚木さんに届けようとしていたようだ。

九重 .....

九重、部屋を去っていく。  
柚木、ヘッドホンをしながら入ってくる。  
かつての部員たちがシルエットで浮かび上がる。  
教室の喧騒はまだ聞こえている。  
耳を塞ぐようにヘッドホンをする。  
彼と、彼の奏でる音だけの世界。

柚木 古今和歌集、詩集、百人一首に万葉集。人は昔、歌を作って、誰かに届けていたそうです。そこまでして伝えたい相手がいるなんてとても素晴らしいことのように思う。……。誰かに届ける歌・・・先生は「いつかあなた達にも届けたい人ができるから」教えていたようにおもう。ピンとこないまま授業が終わる。

シルエットたち、柚木を優しく受け入れる。

柚木 教室の空気がいつも苦手一人で一人になれる場所に向かう。人とかかわるのがあまり得意ではなくて、自分がない方がいいって疎外感ばかりがこの頃は強かった。授業で使わないこの教室は気づけば俺が落ち着くための空間になっていた、そこで自分の魂を削りながら体から音を出す。割りきれない感情、孤独感や焦燥感、本当は加わりたいみたいなちっぽけな感情もみんな歌にして外に吐き出していた。そうしないと自分を保つことなんてできなかったから。でもそれはある日、

部員1 ねえ、

柚木 はい。

部員1 いま、君が歌ったの？

柚木 誰かに聞かれることで終わりを告げた。やばい、どうしよう。とにかく謝ろう。すいませんすいませんすいません、

部員1 歌好きなの？

柚木 ……えっと、はい。

部員1 そっか（優しい笑顔）。

柚木、立ち去ろうとする。

柚木 すいません、

部員1 ねえ、今度ここ来てよ。

柚木 え？

部員1 勧誘みたいな。だめ？

柚木 …失礼します。

部員1 俺もその歌好きだよ。

柚木。お辞儀をして立ち去る。

柚木 ……なんだこれ、

柚木、自分の中の歌への想いがちかちかと疼く。

柚木       ・・人に歌を聞かれたことなんてなかった。歌は自分を守るためにしか歌わないでいたから。ずっと。でも、なんだかもぞもぞするこの感じは何だろう、答えが知りたくて、何かわかりたくて、気づけば俺はもう一度その部室に訪れていた。

柚木、勇気をもって部室に入る。

柚木       ・・・失礼します。

彼の世界におとが増える。

部員 1     やった。来てくれた！

柚木       こんにちは。

部員 2     君か！こんにちは！

柚木       えっと、見学にお誘いいただいたのでお邪魔します。

部員 1     じゃあ、みてもらおっか。

部員たち   賛成一！

部員たち、集まって音楽を演奏する。

柚木、音楽に飲まれている。

部員 1     ・・どう？

柚木       ・・・すごかったです。

部員 4     当然だ。

部員 3、部員 4 をひっぱたく。

部員 1     つきましては君にお願いがって、

柚木       はい？

部員 3     うちボーカルいないんだ。

柚木       はあ・・。

部員 1     だからさ、おねがい！うちで歌って！

柚木       先輩たちが声をかけてくれて、ぼくの世界に音が増えた。普段は人とかかわるのが苦手なのに、なぜか話すことができて・・。勝手な話だけどここが居場所になるんじゃないかって思い込んでいた。

部員 1     柚木歌って。

部員 2 次これがいいな！

部員 4 ....頼む。

部員 3 そんないい方ないわ。

部員 4 ああ、すまん。

柚木 一人で音を奏でていた日々とは変わって、誰かと作る音を知った瞬間。一人でいた時間を埋めるように俺は彼らと作る歌に熱中していった。歌いたい、そうやって心から言える日々だった。

柚木。シルエットたち、かつての部室の風景とかす。  
演奏、充足感に満ちている。

柚木 ずっとなかった居場所をくれた恩返しに俺はひたすら歌いつづけた。恩返しをしたい、いい思い出を届けたい、この歌を彼らに届けたいって思いがいっぱいだった。それから、あつという間に時間は過ぎて、文化祭直前、俺は、声が出なくなった。

柚木、声が出ない。

柚木 練習のし過ぎ、一過性の炎症、風邪とか色々原因は言われたけど、・・・限界がきてたのを知ったのは俺自身が倒れたあとのことだった。

柚木、声がでなくなる。  
会場騒然。

映像 「声が出なくなったのは一過性で、暫くしたらいつも通り声が出た」

柚木 どんな顔して会いに行っていていいのかわからなくて、でもとにかく謝りたくて、感情の整理もつかないまま部室に向かった。でも。

柚木。教室を開く。もう部室には誰もいない。  
若干の散らかり方から喧嘩が起きたこともわかる。  
柚木。喪失感や割り切れない感情ばかりがひしめく。  
柚木、部屋の隅に座り込みヘッドホンをする。  
眠っているようにも泣いているようにも見える。  
九重、部屋を訪れる。  
ヘッドホンを外すまで九重の声は聞こえない

九重 (・・・あ、)

教室、ほかには誰も生徒がいない。

九重 (・・・柚木さん。)

柚木、反応がない。

九重 (・・・柚木さん！)

柚木、起きる。ヘッドホンを外し彼の声が聞こえる。

映像 「第5話 行き場を失った歌」

九重 ・・お久しぶりです。

柚木 ああ・・・うん。

二人、気まずい。

九重 あの、

柚木 ごめんね。

沈黙。

柚木 ・・ごめんね。

九重 ゆのきさん。

柚木 …うん。ごめん(苦笑い)

九重 …。もう、俺、なにも教えてもらえないんですか・・・？

柚木 …ごめん。

九重 やっぱりもうバンドとか嫌なんですか？

柚木 ・・何の話？

九重 部室探してたら、柚木さんの写真があって・・・。

柚木 ・・見たんだ。

沈黙。

柚木 うん。そう。昔バンドやってたんだ。もうみんな居ないけどね。

九重 …。皆さんも、

柚木 ん？  
九重 ……皆さん音楽やりたいって思ってますよ。  
柚木 勝手なことばかり言わないでくれるかな？

沈黙。柚木、すぐに言った言葉のマズさに気付く。

柚木 あ、ごめん…。そんなつもりじゃなくて…。  
柚木 (ため息)ダサいね、俺。  
九重 柚木さん…。

九重、話を受け止めている

柚木 もう音楽に関わってはいけない、人に迷惑をかけてまで携わる音楽になんの意味がある、それなら存在しないほうがいいに決まってる。わかってるよ、わかってるはずなのに、、体はまだどこかで音を探してる。

九重、なにか言いたいが言葉がまとまらない。  
映像、一年前の彼らがシルエットのように浮かぶ。

柚木 楽しかった、あの日々はずっと胸に残ってる。倒れた日も、夢の中でも、俺はあの日々ばかりを夢に見る。

九重、言葉を放つ。

九重 柚木さん。  
柚木 忘れようって思った。それでも、割り切れない感情や怒りや焦燥感、楽しかった記憶やあの日の会話がすべて五線譜に乗って、歌になって、外に出せても見ないフリをし続けた…。そこに、君が来た。  
九重 ……。  
柚木 君の出す音は生まれたばかりの子供みたいで、綺麗すぎて、「ああ、また歌いたい」って、思ってしまった。おかしいよね。こんな人間がまた、人に歌を届けたいなんて。  
九重 柚木さん、  
柚木 勝手な事情に巻き込んで…ごめんね。  
九重 ……俺思うんですけど。皆さんやっぱ、柚木さんのこと待ってると思います。  
柚木 ……そのギター。…元メンバーものだったんだよ。  
九重 ……えっ。

柚木 裏のところにロゴがあるでしょ、それ部長のだったんだ。  
九重 ……そんな。

気まずさしかない。

柚木 みんな集まる気があるならなんでここにそれ(楽器)があるのかな。またやりたいって思った人間が楽器を手放す？そんなことあるわけないだろ！もう集まることなんてない、帰る場所なんてあるわけがない。だってその場所は俺が壊したんだから。

九重 柚木さん、お、俺、

柚木、泣きそう。

柚木 ……ごめん。帰ってくれないかな。

九重 ……柚木さん。

柚木 ……ごめんね。今、君といるのが辛い。

柚木、そっと立ち去る。

九重、楽器を持って帰る。

九重 ……。

九重、帰り道、なんだか泣きそう。

長い沈黙とすすり泣きが切ない。

柚木、空を見ている。やりきれない気持ちで泣きそう。

柚木 星見えないや。

映像 「ずっとドロドロした感情が体の奥の方にたまって、」

映像 「でもそれらを吐き出すには歌うしかなくて、」

映像 「だからこそ、それが戒めになると思った」

映像 「彼らも、音楽も、そして新たに音楽を目指す彼のことも傷つけた」

映像 「今なら間に合うはずだ」

映像 「彼には音楽を楽しんでほしいんだ」

映像 「きれいな音を大切にしたい、俺は」

映像 「俺は、君を守りたくなっちゃったんだ」

柚木、声の出ない涙。

光が落ちる中、モノローグだけが残る。  
九重、楽器屋を通り過ぎそうになる。  
思い立って楽器屋に立ち入る。

映像 「第6話 ギターの秘密」  
九重 あの、すみません。

店主、現れる。(一人で間を感じて頑張って)

九重 あの、この楽器の持ち主について教えてほしいんですけど。  
店主 「あんまりそういうのは教えられないんだけど。どうしてかな？」  
九重 持ち主の方に聞きたいことがあって、  
店主 「そっか・・・」  
九重 やっぱり、無理ですか？  
店主 「何を聞きたいの？」  
九重 えっと、なんでこの楽器を手放したのかなって。  
店主 「ああ、じゃあ呼んでくるから聞いてみな」  
九重 呼んでくる？  
店主 「うちの息子だから」  
九重 む、息子さん？え、あ、ちょっと、  
店主 「おーい、かけるー」  
九重 ……こんにちは。

九重、部長から柚木のことを聞く。  
部長は出てこず九重は一人。

九重 元部長さんは、もう社会人らしく、高校を出てそのまま働いたらしい。あの、

九重、意を決して聞く。

九重 あの、ギター、なんで手放されたんですか？  
部長 「もう使わないから」  
九重 使わないんですね、  
部長 「まあ、そりゃあね」  
九重 やっぱり、もう音楽やめたんですか？  
部長 「ん？」

九重　　だって、大切な楽器じゃないですか。何で売るんですか！  
部長　　「ちょっと、なんで怒るの」  
九重　　だって、大切なものなのに、思い出とかないんですか、  
部長　　「そうだね。確かに大切だよ。」  
九重　　だったら、  
部長　　「だからこそ、売りたいかったんだ」  
九重　　・・・だからこそ？  
九重　　部長さんは。自分が楽器を手に入れたころの話とか、その楽器で何を引いたかとか、ギターの思い出話をたくさん聞いた。話してる時の部長さんはとてもキラキラしてて、ギター大切にされてたんだっていうのがすごく伝わった。それから、思い切って柚木さんの話をしたら、すごく心配した顔をしていた。  
部長　　「柚木、元気？」  
九重　　・・・(答えづらさから空気が伝わる)。  
部長　　「そっか、」  
九重　　・・・柚木さん、歌うのが申し訳ないって、ずっと、  
部長　　「じゃあ、君が柚木を助けて」  
九重　　俺が・・・助ける・・・。  
部長　　「君と柚木の本番楽しみにしてるよ。」  
九重　　出たって言ったら..断られちゃいました。  
部長　　「そっか、」  
九重　　はい、でも、なんか、このまま終わるのも違うかなって、  
部長　　「柚木と歌いたい気持ちはすごくわかるよ」  
九重　　わかりますか！？ですよねぇ。  
部長　　「あのときは楽しかった。柚木の音が面白くて、」  
九重　　柚木さん、歌ってるときやっぱり楽しそうだから、俺は歌ってほしいんです。  
部長　　「なんでもいい、柚木が歌を好きなままだったら」  
九重　　・・・・・・。俺にできますかね。  
部長　　「始めたころの柚木そっくりだよ。」  
九重　　そっくりとか照れますよ。  
部長　　「歌ってる柚木を見て俺も安心したいんだ」  
九重　　・・・。本番来てくださいね。失礼しました！

九重、お店を出ていく。集中している。  
ほほをたたいて気合注入。

九重　　・・・・・・よしっ。

九重、走り去る。

柚木、また教室で外を見ている。

九重、走ってくる。

映像 「第7話 もう一度」

九重 …。

柚木 ……………。

柚木、彼の気配に気づく。

柚木 なに…？

九重 俺、うまくいえないんですけど、

柚木、驚く。

柚木 ……。

沈黙。

九重 ……俺、

九重、勇気を振り絞る。

九重 ……俺。やっぱり歌いたいです。柚木さんと。

柚木 ……。

九重 俺、柚木さんが音楽たのしんでるの見て、すごいなって。俺もこうなりたいてって思ったんです。それから、柚木さんを助けたいって思ったんです。

柚木 ……。

九重 勝手なこと言ってるってわかっています。でも、

柚木 悪いけど、ごめん。

九重 でも…。

空気、静か。

柚木 ごめん、帰るね。

九重 …。やっぱりおかしいです。  
柚木 …。  
九重 こんな逃げるみたいなの。絶対おかしいですよ。  
柚木 逃げるってなに。  
九重 逃げてるじゃないですか。  
柚木 君になにがわかるの？  
九重 このままぐちゃぐちゃ悩んで諦めて、それで終わりなんてそんなのおかしいですよ！！  
柚木 何なんだよさっきから！

九重、空気に若干押される。

柚木 今更できるわけないだろ。人の居場所を奪っておいて自分は悪くないなんて。  
九重 でも、今の柚木さんが悩んで苦しむなんてだれも望んでないですよ。  
柚木 何がわかるんだよお前に！

柚木、もういっぱいいっぱい。

柚木 あの日、また一人になったんだなって思って、すぐに慣れると思った。でも思い出がありすぎて、時間が満ちすぎて、いっそ記憶から全部なくせたらって何度も思った。  
九重 ……。  
柚木 こんな全部自己満足だってわかってるよ、でも、あの日の謝り方なんてほかに思いつかなかった。そうやって割り切ろうとしても、何もない教室は一人だと広すぎる。  
九重 柚木さん。

九重、柚木をしっかりなだめる。

九重 俺ここにいます、ここは何もない教室じゃないです。ここには、柚木さんたちが歌を好きだったって思いがずっと残ってます。

九重、写真を差し出す。引き出しにあったやつ。

九重 ……全部がなくなったわけじゃない。そうでしょ？  
柚木 なにこれ。

柚木、を受け取る。長い沈黙。

柚木、回想。楽しかった日々が音楽になって溢れる。  
思い出、誰も柚木を攻めていない。

九重 ……俺、柚木さんを守りたいです。

柚木 ……。

九重 何かをなくすのは、仕方ないと思います、でも、時間や、新しい思い出が絆創膏みたいに静かに傷を癒していくんだと思います。だから、全部失くすなんて悲しいこと言わないでください。

柚木 ……。

九重 俺、いやですから。このまま柚木さんが音楽できなくなるなんて嫌ですから！

柚木 ……。

九重、少し泣きそうになってる

柚木、写真を見ている。

柚木 俺、もうやっちゃダメだって思った、もう、いいのかな。

柚木、優しい笑顔。泣いているのかもしれない。

柚木、九重のかおを見て。

柚木 ……ごめんね。

九重 謝らないでください。

柚木 君には謝ってばかりだなあ…。

二人、落ち着く。

柚木 …ありがとね。

九重 柚木さん…。

九重、泣いてる。

九重、柚木を抱きしめる。やさしく。

空には星が戻っている。

ゆっくり暗転していく。星は瞬いている。

九重、ライブのシャツを着ている。

映像 星は見ている。遠くからずっと、

映像 見つけてほしいって叫ぶように光っている。  
映像 この歌が届くかはわからない、  
映像 今彼らが何をしているのかさえ分からない、  
映像 それでも、  
九重 歌、歌は魔法だ。心が荒んだ時は薬になり、悲しい時には寄り添う力になり、  
道がわからなくなった時は道標になる。歌は人を救う力がある、だから、  
柚木 だから、俺は歌を歌いたい。俺の歌はきっと

柚木、九重、ライブのシャツを着ている。

柚木 その人のための歌だから。  
映像 届いてほしいって、どこか願ってしまうんだ。  
映像 「第8話 誰がために人は歌う」

部隊の外から人の声がする。  
二人、死ぬほど緊張している。

九重 ……来ましたね。  
柚木 ……。  
九重 柚木さん？  
柚木 ん？なに？  
九重 ……大丈夫です？  
柚木 ……どうだろ？

九重、笑っちゃう。

九重 自信持ってくださいよあんなに練習したじゃないですか。  
柚木 まあ、だね…。  
九重 ……大丈夫です、きっと届きますよ。  
柚木 ん？  
九重 それになんかあっても俺が守ります。最後まで一緒に歌いましょ。

九重、すっかり頼もしい。

柚木 素人が何言ってんだか。  
九重 お互い様でしょ。

二人、笑ってる。

九重 あ、そうだ。柚木さん。  
柚木 なに(笑ってる)?  
九重 俺柚木さんの歌好きです。  
柚木 うん。俺も君の声好きだよ。  
九重 えっ・・・。

出番が来たようだ。二人、ステージに進む。  
部長、ステージを見ている。

柚木 こんにちは。えっと、今日、舞台に立てて、とてもうれしいです。

会場、優しい。

柚木 俺は、あまり、自分のことが好きじゃありませんでした。半端に歌って、区切りも付けられなくて、それでもどうしていいかわからないまま、今日までそれを避けてました。でも、

柚木、九重の顔を見る。  
九重、自信がある表情で目が合う。

柚木 でも、それらすべてがあって、今の自分があるから。だから

柚木、部長たち、柚木に声をかける。柚木、気づく。  
柚木、しっかり受け止める。

柚木 今こそ、届きますようにって。心から願うことができます。きっとあなたたちに届いてほしいって、願うことができます。前を向いて、彼と歌うことができます。

九重、しっかり彼を受け止める。

柚木 俺はもう大丈夫です・・・聞いてください。

柚木、思いっきり息を吸い込む。

劇のタイトル、映される。

映像 「君を守る歌が歌いたい。」

おしまい。